



TITLE:

渡歐日記(第四信)

AUTHOR(S):

寺田, 貞次

---

CITATION:

寺田, 貞次. 渡歐日記(第四信). 地球 1924, 2(5): 597-604

ISSUE DATE:

1924-11-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/182769>

RIGHT:

# 渡 歐 日 記

(第四信)

## 寺 田 貞 次

誠に香港は支那廣東省珠江の河口に横はる一小島(約三十方哩)に過ぎないが九龍の半島と相對し其附近に在る數個の小島と共に東に「Ta-tong-chuanee」西に「Lamma-chuanee」を控へ水深くして自然の港灣を形成し如何なる大船でも容易に入港し得、案内記に世界屈指の天然良港と評せらるも過言でない古來支那海賊の根據をなしたのも偶然でない、然かも此地は珠江の入口に横はり珠江は物資の豊富な廣東並に雲南を貫流して居るから此等諸州の産物皆此江に依て運ばれる、若し香港にして港灣としての設備を完全にし世界船舶の出入に備へるならば廣東雲南等南部支那の物資は此處に集り、海外の商品は之より供給する事が出来る位置に居る。之が英人をして着眼せしめた所以である。然し香港島は小島であり港として多數の住民を収容するに適しない。香港島のみでは到底港としての價値を全ふする事は出来な

龍を租借し九龍、香港相俟て初めて港としての活動を完全にする事が出来たのである、夫て英國としては領土の關係上香港島を根據とし港としての機關は之を島上に設け、船舶の碇泊並に住宅地は之を對岸九龍に設ける事にした。山頂に立て港内を見下す此關係はよく知れるので九龍半島の兩側には大岸壁が數個在り、大船が之に横づけになつて居るのが見える、米國通の巨船エンプレス號の如きも倭に其巨體を横たへて居た、上屋の如きも岸壁に沿て設けられ、又タイフーンに備ふる防波堤も堅固に築かれて居る、廣東への鐵道も半島の先端に發し停車場は香港と相對して海岸に建てられ香港から聯絡を保て居る。住宅地も多く九龍に建設せられ、現今香港の商館で活動して居る會社員店員等は大部分九龍に住し香港に通勤する狀態で香港九龍間には小汽船の往來絶えず通勤時間の如き實に五分毎に往來して交通の便を計て居る、斯くて廣東雲南方面の物資は皆九龍に集り、香港は南部支那を始め關領印度馬來比津賓佛蘭印度支那、南洋諸島等附近諸國との中心市場中繼貿易地、東洋唯一の海上交通の中心として發達したのである、然し此發達は僅々百年來の事で以前は全く不毛の一小島たるに過ぎなかつたと思ふと、

單に自然的要素の然らしめたのみさば考へる譯にはならない、其處に非凡の努力の加はつ居る事を忘れる事が出来ないものである。之は日本等から始めて當港に來た者の誰しも感ずる處で、單に設備の點に於て許でなく、以前は瘴癘の氣甚しき地でベスト、痘瘡等惡疫の根原地の如く目せられて居たのを現今にては殆ど之を根絶して健康地たらしめ不撓不屈香港をして今日に至らしめた其努力には感服せざるを得ないのであります、中目覺氏が渡歐の際此山腹より市街を見下して英人の壯圖に驚き其根氣の強さに感心すると云ふて居るのは當然である考へた。

港の觀察は此位に止め、再ケートフルカーで下り植物園を觀る疲勞を覺えたので充分の觀察は出来なうだが廣大でない割合に熱帶性植物がよく集められてあり中央には噴水設備もあり専門家には有益な場所、思ふた、之れから Macdonnell road へ通り三井物産の倉庫所に着した。二階建英國式の古風な建物、以前支店長住宅であつたもの、庭球コートも準備されて居る、竹村君の室はもと支店長の居室さかで最廣大、設備もよく廊下に出るさ港内一望の中にあり我が乗船香取丸が正面に見えて居る、入浴湯衣がけて涼む爽快畫の疲勞、忘れん許であつた。竹村君の書棚に香港概観と云ふ書を發見した。三井物産に居た前田實治郎と云ふ人が在香港中に調査したもので少し古いが（大正八年出版）港の概要を知るに好適であるので早速一讀實地の觀察と合はせて香港に關する概念を確實にした。丁度同室者が不在であつたので今夜厄介になる、流石熱帶蚊を防ぐ装置は完全に出来て居る、マラリヤな恐れて居る自分には至極結構、扇子戸越し

にヒョクに點々たる電燈をながめながら安眠した。

□月七日、稍曇、早朝廊下に出て港内を見下す壯觀である、九時のランチで歸船するので緩つくり出来ない、何處でも朝の氣分は同じだが唯日本と異て朝から蒸し暑い感が去らないだけで、學校に通ふ兒童や、通勤の會社員やの往來が繁く見える、苦力は既に勞働に従事して居る随分早くから働くに驚いた、棧橋に出ると昨夜陸で泊られた岸博士、本永博士等に出合ひ竹村君に別れ同ランチで歸船した、空潮次第れ十一時を以て出帆する、船員は何れも白服に着かへ、甲板には藤椅子が増加された藤椅子は極く安價、脚約三圓、歸航の際には此邊に來るさ藤製品、上海では紫檀、黑檀製品で甲板がうづ高くなる、船員は談て居た藤は熱帶の特産で新嘉坡、彼南に至る處産出があり製品も多く賣出される、船は入港の際、反對の方向に島の間を進み Lantau 島の南を通じて海に出る珠江の入口だの、媽港の方角等示され今昔の感にうたれる、天氣益々晴朗で海の景色美しい。大阪商船のアルプス丸と何時の間に並行して走る事になつたが暫くで別れてしまつた、彼は海岸近くの航路を辿り、餘の船は他の航路を取るのである、上海出帆後眼をため充血甚しい。船醫の治療を受けたが一向効果がない、幸同乗の名古屋醫科大學教授小口博士の御厚意で今日から治療して戴く事になつた、夕食後小口博士の室で來遊の名古屋の醫家福井富雄氏と共に諸曲をうたふ、福井氏は名古屋で寶生流諸殊に堤（ツ、ミ）の本である。

入日、晴、空晴れ波亦靜かである、早朝甲板に出て散歩す、

勞働代表の鈴木文治氏却々の朝起愉快に御早うな交際する、昨日迄苦んだ眼症によくなる流石は名家の治療と驚く引きつづき治療を受ける、午前ボートテツキで例に依り謡曲、船長も來會する、晝には香港から既に三、餘哩、北緯十六度餘の處を非て居る、暑さは段々強くなる、海は靜穩暑さは増したので午後は船客各々上甲板に出て寢可子により午睡を初める。今更ながら南洋旅行の際平滑な太平洋上に午睡した昔を追懷した、上海を出るさ初める豫定であつた水線は天候の都合で延々して居るが愈々今日より開始された甲板上に午睡する暑苦しさに反し意外の涼味を感じた、賑な夕食をすませて再甲板に出るさ終日照りつけた太陽は地平線に滄紫の雲を棚引 せて美しく没し、後には月明に星清く輝て居る、氣の早い連中は日本で見えない星を觀んと盛に説明を初める、航海中の夜は星の研究も一入面白い、今夜餘の船室は風向の都合で非常に暑く乗船以來初めての苦痛を覺え熟睡出来なかつた。

九日、晴、熟睡出来ないので早く起きる、船首Cテツキのタシキは相當の賑ひで金栗選手の活動殊に目覺しい、朝から暑く八十度を示して居る、午前十時船客の短艇操練がある、汽笛長聲一發、銅羅連打と共に一同救命胴、着川規定のボート側に集る、馬鹿氣で居るが面白い、晝船は香港から六百六十哩、北緯十一度五十分を走て居る新嘉坡は、百八十哩で丁度半來たわけである、熱帯地方の特徴るスコール(雷雨)が初めて襲來した雷鳴も聞、然し南洋旅行で屢々大スコール 經驗した自分には珍しくもなく又烈しくも感じない、小口、本永氏と諸を

うたつて居た、徳岡博士、渡邊誠氏も來會館であつた、夕頃再スコールが來襲した、英國船の香港行に出會つた、夕食後上甲板に出る、涼風爽快、又星の説明が初まる、聞くに『海のローマンス』の著者米窪太刀雄氏であつた、今夜も風向の都合で寢苦しい事限りがない。

十日、晴、今日も熟睡が出来ないので早く起きる、上甲板散步鈴木 治氏相變らず早起、地平線上には早朝から驟雨の暗雲立ちこめて居る亦趣ある景色である、午前中例により本永、小口氏と諸る、晝には北緯七度餘分、東經百八度の處を走て居る、カンボデア半島よりは餘程南になつて居り、新嘉坡へは既に四百五十八哩に過ぎない、都合よくば明朝早く新嘉坡に入港し得るさの事で一同勇む、午後風の方向、變り予の船床は、氣になり初めて蘇生の思をなした、上海以來の眼症は小口博士の御厚意で僅々五日で全治した、流石は天下の名醫、暇でもらつただけでも治ると同食卓の誰かと云ふたに、はない、御縁なくば一寸見て戴けない名家に、然も毎日衛生室出張を願て治療してもらふ、全く同船同行の賜物と深く感謝した、同食卓の京童子は診察料を如何したとひやかす。

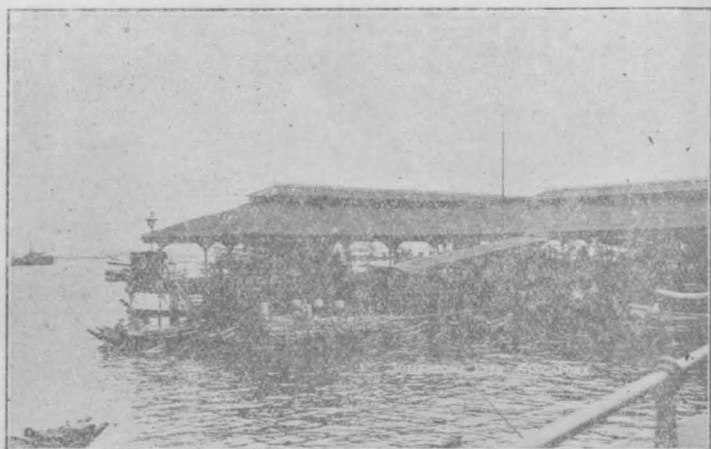
十一日、曇、早朝甲板散歩、左舷に島を眺む、南洋諸島の一なる Amba 諸島である、久振にながめた島とて地圖などから出してな、むる人が多い、海國に依り群島中の大きいのは Janya 島其最も近くに在つて燈臺の見えるのは Pals Munt 島である事を知つた、朝以後例により諸る、船員 短艇操練がある、競争で操練する、晝には北緯二度三十七分の處まで來た、新嘉坡

へは餘す處百三十二哩である、今夕にも入港し得る考であつたが潮の都合で少し後れ今夜中に附近迄行き碇泊、翌朝入港の都合になる、又船員の談に依るに香港から新嘉坡への航路は陸岸近くを走る場合と、然らざるものと二條ある、時季に依り何れかを選ぶので冬季は風は北から吹くので潮は之に従て流れ、夏は之と反對に所謂モンスーンが南西から吹くので潮も之に従て變る、故に冬季新嘉坡に向ふには陸岸より遠い道を取り、夏は近い方を通るを常とする、本船は前述の如く香港出帆後沖航を選たので潮の逆流に會し豫定よりおくれる事になつたのである、今日香港行の船に二艘迄出合つたのは此潮を利用したに因るさ、然し思つた程の遅延ではなかつたと見えて、夕の大驟雨が晴れたと思ふさ、今迄の曇雲は何處かに去り夕風のみしき船首前方の地平線上に低い島二個を睥めた、餘りの美しさに一同船首甲板に出て眺める、左方は馬來半島の先端で右方は半島の前面に横はる Bintang 島である、先年御用船に便乗新占領諸島視察の際知合になつた海軍少佐長田醫學博士は島の低く植物景觀南洋的なるを觀、珊瑚島であらうと物談り當時を追懷した、何時しか月は朧に海上を照せば鳥影うすく燈臺の光のみ時々暗を破る、一つは Bintang 島上に、一つは海中の孤岩上に立ち新嘉坡への入口に在るのである、夕食をすませ再甲板に出ると燈臺は近く左舷を過ぎ船は既に海峡に進み對岸遙に電燈の數多輝くを見、來往の汽船の黒い姿も益々増加して見える、水の深さを計りつゝ徐々に進み程なく拔錨した、今夜は此處に假泊明朝入港するのであると、流石は海峡碇泊中ではあるが涼風絶えず、

赤道直下の場所とも思はれず涼しい。  
十二日、雨、珍しく空曇り細雨氣持惡し、船は既に入港、檢疫の後靜かに岸壁に繋がる。タンザン波止場と稱する處で長さ



タンザンヤン



場止波ントスンヨジ

町餘の岸壁、褐色屋根の上屋が並んで居る、早朝にも拘はらず割合の賑ひで上屋の軒には十數名づゝ一團をなし着船を待つて居る、黒、白、藍等の着服が眼につく、黒きは正しく馬來人が將

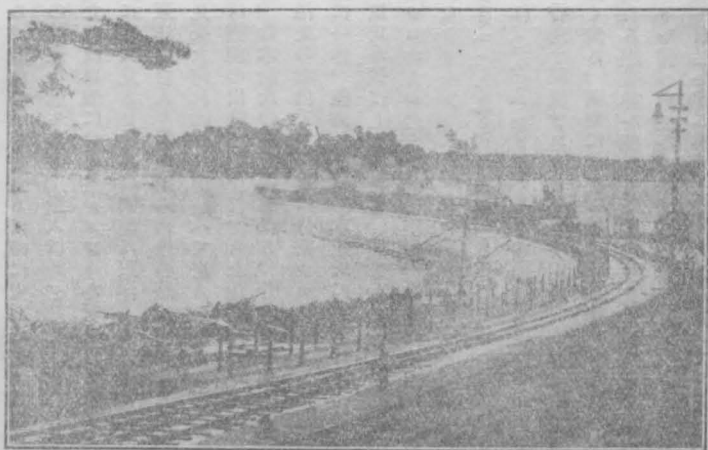
印度人が、白きは白人か、段々近づいて見ると流石人種の落合場所、色々の人間が居る、眞黒の馬來人、印度人、黒い身體に赤縞等色物の腰巻長く、頭には白布をまきつけて居るのや、頭髮を後に結んで大きな藍甲櫛を戴いて居るのや様々のいでたちである、藍色の服を着たるは確に支那の苦力筒袖の着物に椰子葉製の陣笠を冠て居る、歐人は殆ど見受けない、先程から白く見えたのは白服に白のヘルメットを冠て居る我が同胞である、此處に來て見ると流石に同胞は東洋人中一頭角をあらはして居る、東洋の白人、我ながら自惚の感にうたれた、中には婦人も二三見受た何れ誰かを出迎へて居るのであらう。

船は明朝の出帆と定つたから上陸に決し、徳岡、本永、小口渡邊、升本諸氏の一行に加はる、升本氏の知人三井物産の五十嵐作治氏の案内で自動車に分乗ジョンスン棧橋附近なる三井物産に一休、徳岡、小口、本永氏に別れ升本、渡邊兩氏と共に五十嵐氏を煩はし見物する、遠方から先にせんと約七哩を隔てたるジョホール(Johore)に至る、海岸に沿ふて設られてある緑豊かなクリケット大グラウンド畔を走り Hotel de l'Europe, St. Andrew's Cathedral, Railies Institution 等の大建物を眺めつゝ、左に折れ Orchard Road を云ふ大通を北に博物館前を経て走る、道は香港と同様アスファルトで固めた立派な道で自動車は滑るが如く走る、兩側には熱帯性の老並樹が枝を交へて日光を遮り廣漠たる熱帯林を應用して住宅をさし或は花壇を設け、テニスコートを備へ自然を友とするの感を抱かしめ、田舎的であるとは云へ自然を害ふ事なく然も人工の届いて居る一大公園の感あ

らしめた香港の地勢急峻で窮屈であるに反し、此地の低い丘陵  
 性で餘裕のある、香港の綠樹に乏しきに反し此地の綠豊かなる  
 何さなく住心持よき感にうたれた、やがて人家を脱し支那人の



ドーロ・ドーヤチーナ

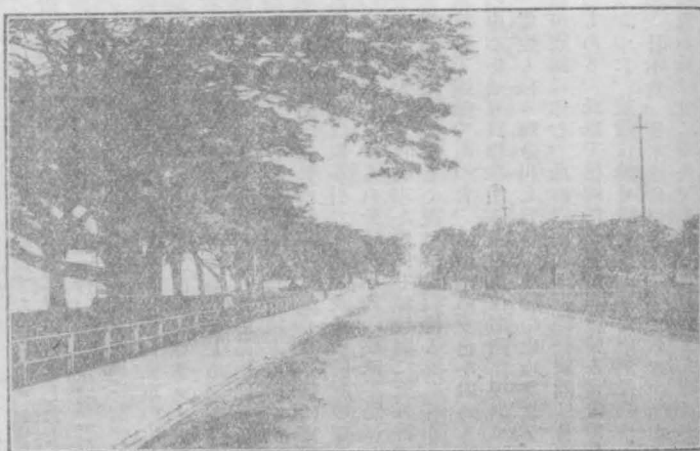


新嘉坡の海峡

(ルーホヨジが開ふ向)

汚ない町を過ぎる道は次第に細く兩側一帯の護謨園となる、  
 馬來半島の護謨栽培に好適なるは誰も知る處、如何にも際限な  
 く發達せるには驚かざるを得なかつた、採集こそして居なかつ

たが護謨液採集器の樹幹に備付てあるのを観る事が出来た、然し現時は護謨下落の爲め護謨園も相當荒廢の傾向をあらはして居る、走る事約四十分新嘉坡島の北端に出る海峡を隔て向ふが  
 シヨホール州である。



シヨホール一ルパル

シヨホールは馬來半島中の一州で、今尚シヨホール王の權下にある、半島中護謨栽培の發達せる處、殊に邦人の經營も多いと云ふので知られて居る、見物したのは所謂シヨホールバル (Johore Bharu) で王の在住地、云はゞシヨホールの都であります、新嘉坡島との海峡は三町もあらう、今は橋狀に埋め立て鐵道、歩道をなし、シヨホール側に一條の運河を設けて水を通して居る、工事中で自動車不通である、運河を渡り圃所の様な狭苦しい橋を通るシヨホールバルである、海岸に少許の商店軒を並べ邦人經營の店も一軒ある、雜貨を商ふて居る、再自動車でシヨホールバル内を見物する、一帯赤土質の緩丘陵、通路縱横に通じ、海岸と云ひ丘陵と申し一面人工を加へた青々とした芝生で、名を知らない熱帯の綠樹立ち並び或は美花を開き、美果を結べる到底拙筆のあらはし及ぶ處でない、手入のよく行き届いた美しい自然の大公園であります、王宮前を通る相當立派な洋館、王は日本人には多大の厚意を有して居る、少し隔れる回教の一院を拜觀する、古雅な石造建築物で、洗身場から禮拜堂に至る迄大理石で敷きつめてあり回教の事であるから佛教の様な偶像などは置かれてはないが何さなう壯麗に出来て居る參詣人簿に記念署名する、勞働會議出席、鈴木氏一行は既に參着したと見えて署名してあつた、病院前を通り各所散在の原始的な土人住家を見、シヨホール監獄、扱ては虎の檻、昔時囚人を此檻に投げ虎の餌に供したと傳ふるもの等を觀、王の墳墓に參拜す共同墓地の中央に在り、立派な石造建築物中に安置せる石棺で何れも大理石製の壯嚴なものである、共同墓地にも石棺を置たのもあるが多くは墓標を建つるのみである本邦の墓標とは異て面白い、シヨホールの有名な護謨園から競馬場、其傍に



在る王の住宅をも觀再海岸に歸り海峡を渡り自動車に乗りかへもこの道の新嘉坡に歸つた。

晝も過ぎたから Europe Hotel で晝食する、ラッフル街に在り、當地の開拓者ラッフル (Raffles) の銅像が其前に立て居る、此ホテルは最近の建築で現今當市唯一のホテルである。午後には市内の見物にかゝり博物館を縦覽する、Raffles Museum と稱し圖書館と並立して居る、丁度觀覽時が一致したものでか余の一行に次で三井家一行、織田博士一行、勞働代表一行、オリンピック一行、資本代表一行と云ふ順で一度に觀覽したので館内は俄に賑かになり、玄關前は時ならず自動車の山をなした、階下から見物する、玄關口には當市開拓者ラッフルを始め當市關係者の寫眞を掲げ先づ開發當時を祭せしめ、次で附近發掘品、石器時代の遺物から土製の佛像土人風俗品を陳列し、階の兩側には亞細亞に關する古圖、階上は馬來地方の動植物を網羅し殊に蛇類は衆目を引て居た、礦物の蒐集も多く殊に玄關の中央に置かれた錫の大鎖は眼を引た、馬來及此の附近の島々は世界での錫の主産地であるから自分には一入の趣味を感じしめた、時間がないので大急で自動車を飛ばし植物園に至る香港の夫に比すると規模廣大なる詳しく觀れば餘程得る處あらうと思ふたが自動車旅行で遺憾であつた、水源地の夕色を眺めて車をかへし繁華の中心を通り買物をする渡邊氏は名産藤製ステッキに熱中した。電燈も徐々輝き出したから見物を止めラッフル街の邦人經營領田旅館に休む、此附近には邦人經營旅館に日本ホテルと云ふものもある、此處で徳岡博士一行に會する豫定であつたが都合へなかつた、旅館は餘り設備もよくないが矢張り上陸するに日本疊、日本食、日本風呂が戀しい爲である、湯衣に着かへて横はつた心持は實に愉快である、夕食の上九時にもなつたから



園物植

自動車走らせ船に歸る、徳岡氏一行もやがて歸て來た、星野勇三博士醉機嫌で甚愉快氣爽、室を賑はす、荷役が終夜絶えない喧しいので暑いので熟睡が出来ない、但し岸壁繫船に似ず蚊の來なかつた事は何よりの幸であつた。